３、大石神社　宝物殿編（大石神社境内マップ参照）

　①「第１義士宝物殿」

こちらは、大石内蔵助の刀です。備前長船（びぜんおさふね）で作っています。岡山県長船は赤穂から西へ約２５ｋｍで、古くから刀鍛冶（かたなかじ）で有名です。

右上の写真は、忠臣蔵に関する映画や芝居が出来た時、主役の方達が興行の成功を祈って、大石神社にお詣りしたときのものです。

こちらの采配と呼子笛は大石内蔵助が討ち入りの時実際に使った物です。討ち入りの時吉良邸周りにいた内蔵助の縁者（大石無人、三平）の子孫が奉納したものです。

こちらは、堀部安兵衛（ほりべやすべえ）の討ち入り姿で、江戸の火消し装束です。目印に両袖口に白い布を付けていました。

堀部安兵衛は、もと中山姓で、新潟県新発田（しばた）の侍です。江戸高田馬場（たかたのばば）で義理の叔父の果たし合いで、助太刀をして、相手３人を討ち果たしました。よく１８人切りなどと言いますが、これはどうも話が違っているようです。

堀部弥兵衛は安兵衛の行動に感銘し、養子に迎えることを強く願い、はじめ渋っていた安兵衛をとうとう口説いて、養子縁組に成功しました。安兵衛は、生涯２度の果たし合いをしたことになります。これは当時としては非常にまれなことです。（１度も斬り合いなどしない人がほとんどであった。）

こちらに武林唯七（たけばやしただしち）の討ち入り姿があります。唯七の祖父は中国人で孟二寛（もうじかん）といい、医者でした。豊臣秀吉が朝鮮へ出兵したとき、朝鮮軍の応援兵だったため、日本軍に捕らえられ、日本に連れてこられました。唯七は孟子の子孫であることを誇りとして、祖父の出身地である上海の近くの杭州武林（こうしゅうぶりん）の地名を姓にして武林（たけばやし）としました。

こちらは、忠臣蔵の名場面の写真ですが、本物の絵馬は、あちらの拝殿、本殿の回りに掲げられているものです。

忠臣蔵の正式な題名は「仮名手本忠臣蔵（かなてほんちゅうしんぐら）」で、討ち入りから４７年目、１７４８年に人形浄瑠璃（にんぎょうじょうるり）として上演されました。「かな」４７文字と４７士をかけ、「手本」は武士の手本となる行いをした。「忠臣」は忠臣、「蔵」は忠臣がいっぱい詰まった蔵という意味と、内蔵助の蔵をかけています。　「仮名手本忠臣蔵」の物語は刃傷、討ち入り、４６士の切腹という、約２年間の出来事を幹にして、そこへ作り話を枝のようにつけて、壮大な物語を形成しています。

②「第二義士宝物殿」

それでは、隣の宝物殿別館へご案内致します。

こちらは、「両国橋引き揚げ（りょうごくばしひきあげ）」の場面を４７士の人形で表していますが、吉良邸から泉岳寺までの引き揚げでは、両国橋より下流の永代橋（えいたいばし）を渡りました。討ち入りは１４日（現在だと１５日）午前３時半、引き揚げは１５日午前６時から９時頃です。１５日は大名の江戸城への登城日です。両国橋は大名の登城路となっていたため、大名達と出会うことを避けるため、永代橋を渡ったのです。ところで、午前３時半と言えば、現在では次の日になっています。したがって、現在流に言えば、討ち入りは１２月１５日となりそうですが、江戸時代は日の変わり目が日の出を境としていましたので、やはり討ち入りは１２月１４日で良いのです。そもそも、討ち入り１５日ではさまになりません。やはり討ち入りは１４日と言わなければなりません。

こちらに浅野家の系図があります。１番上に浅野長政、この方が家祖です。豊臣秀吉の義理の弟になります。奥さん同士が姉妹です。（ねね＜秀吉正室＞、やや＜長政正室＞）年齢は秀吉より８才年下です。

長政に３人の息子がいて、関ヶ原では浅野家は徳川につきましたので、長男幸長（よしなが）は、和歌山城主３７６０００石になり、次男長晟（ながあきら）は幸長の養子になって、和歌山城主二代目の時、国替えで広島城主４２６０００石になり、明治まで広島本家として続きます。

三男長重は、長政の隠居料５３５００石を相続して、茨城県笠間城主になり、長重の長男、長直の時、国替えで赤穂に来ました。赤穂浅野家初代です。二代目は長友、三代目は長矩、この時刃傷事件が起こり、お家断絶になります。赤穂三代５７年でした。

こちらは、大石家の系図です。系図の中程、右の方に太い字で①良雄、「よしお」と読めますが、正しくは「よしたか」と読みます。大石内蔵助良雄（おおいしくらのすけよしたか）です。子供が５人いまして、「くう」さん「るり」さんは、女の子、長男の主税（ちから）は父といっしょに切腹しました。次男良以（よしもち）は坊さんでしたが、１９才の若さで病死しています。三男良恭（よしやす、大三郞）は討ち入りの１１年後、広島本家が内蔵助と同じ１５００石で召し抱えています。この良恭の子孫が大石浩史（ひろし）さんで、１１代目です。浩史さんは奈良県天理市に在住で奈良県庁に勤められています。男の子が２人いますので、１２代目まで続いています。

こちらは、浅野家のあと、１７０６年から明治まで１２代続いた赤穂藩主森家２万石

の系図です。森家の系図の上の方、かっこ書きで、蘭丸（らんまる）、この人は、織田信長の小姓で有名な森蘭丸です。蘭丸１８才、坊丸１７才、力丸１６才の３兄弟は１５８２年の本能寺（ほんのうじ）の変で信長とともに討ち死にしています。１番下の弟、忠政（ただまさ）は、関ヶ原で徳川についたので、岡山県津山藩１８万石になりましたが、そのあと世継ぎが絶えそうになって、２万石に減らされます。

③「義士木像奉安殿（ぎしもくぞうほうあんでん）」

こちらの義士木像は、昭和２８年（１９５３）忠臣蔵２５０年祭を記念して、当時日本の一流の彫刻家が、一人一体ずつ作り納めています。正面右は赤穂浅野３代目の長矩公で、作者は平櫛田中（ひらぐしでんちゅう）先生、左の大石内蔵助は山崎朝雲（やまざきちょううん）先生で、いずれも当時日本トップクラスの彫刻家です。

あとは、右の方から表門隊、続いて裏門隊と並んでいます。像はいづれも、作者のイメージで彫っています。

義士の名前の横に役職名と給料が何石（なんごく）何人扶持（なんにんぶち）などと書いてありますが、これを今の給料に換算すると次のようになります。

１石は一両とだいたい同じです。一両は１０万円と仮定します。ただし、石数の場合、

１０石というと、１０石米がとれる領地から年貢を採れることを表します。４公６民（しこうろくみん）として、０．４をかけます。

例えば、大石内蔵助の場合、１５００石なので０．４をかけて６００石、１０万円かけると年収６０００万円になります。

では、一人扶持（いちにんぶち）はいくらになるかですが、これは、一日５合と計算します。５合かける３６５日で１石８斗になり、１０万円かけると１８万円になります。 義士４７人のうち、大石内蔵助と主税のように親子関係が８組、間十次郎（はざまじゅうじろう）新六（しんろく）のように兄弟関係が５組、血縁関係が２５人、一人で参加した者２２人です。結束が固かった理由と言えるかもしれません。子孫がはっきりしているのは１８家です。

４７人目が寺坂吉右衛門です。吉良邸に討ち入ったときは３８才で、亡くなったのは８３才です。寺坂のみ切腹していません。引き揚げる途中で逃げたという説もありますが、討ち入りの様子を知らせるための生き証人として、大石内蔵助が逃がしたのだと思います。最後の４８人目の像は萱野三平（かやのさんぺい）です。刃傷事件を、赤穂に知らせた第１番目の早かごの使者の１人です。赤穂では４８人目の義士と言っています。 赤穂城を幕府に明け渡して、赤穂藩の武士（約２７０人）は浪人になりました。三平の父は、次の仕官先を決めていました。しかし三平は同志とともに殿の無念を晴らしたいと考えていました。そこで、親に対する孝をとるか、殿様に対する忠をとるか、の板ばさみになり、討ち入りの１１ヶ月前の元禄１５年１月１４日に切腹してしまいました。

生きていれば、きっと討ち入りに参加していたでしょう。既に死んでしまったので、この木像は亡霊の姿になっています。

④「大石邸庭園」

こちらの庭園は、浅野家の家老、大石家が住んでから約３５０年がたっています。中央に池を配置した庭は最初の頃とあまり変わっていません。池の向こうの大きな木は樹齢３００年以上で、大石内蔵助がここで生活していた時には既にあったことでしょう。

正面の建物は、大石邸長屋門で、裏から見ています。

門の扉のところに複製した早かごがあります。かごをかつぐ人は前２人、後ろ２人、綱で引っ張る人が１人、後ろから１人が押す。駕籠かきは宿場ごと、５～１０キロごとに交替します。江戸から赤穂まで６６０ｋｍを４日半、１１０時間で来ました。普通は歩いて１５日かかりました。

この長屋門は創建当時のもので、北側にあった屋敷は享保１４年（１７２９）に火事で焼失してしまっています。

長屋門の部屋を利用して、右は早かごの使者が刃傷事件のことを内蔵助、主税に報告している場面を、左は大石家の家族を再現しています。

これで、大石神社の宝物殿などの案内を終わります。